国際研究論叢　19（2）：181～199，2006

翻　訳

# アウシュヴィッツの人間（7）

ヘルマン・ラングバイン
訳：柴　嵜　雅　子*

# Menschen in Auschwitz

Hermann LANGBEIN
Übersetzt von Masako Shibasaki*

**キーワード**
アウシュヴィッツ、ホロコースト、ラングバイン

## ＊ヴィルツ

絶滅機構に不承不承、仕えていたＳＳ医の中で、もっとも重要なのはエードゥアルト・ヴィルツだった。絶滅に対する彼の反感は、囚人にとってきわめて大きな実際的な意味を持っていた。というのも、1942年９月初めからアウシュヴィッツ撤退に至るまで、すなわち大量殺戮が行なわれたほぼ全期間にわたり、ヴィルツは医務長をしていたからである。彼は自らの見解に基づき、他のどのＳＳ医とも異なる結論を導き出した。

私はすでにダッハウでヴィルツと知り合いになっていた。囚人看護室の内科で私は書記をしていたのだが、そこで初めて彼に会ったときのことを、次のように記録している。

「新しい医務長が来る。名前はエードゥアルト・ヴィルツ。背が高く、黒っぽい色の髪は薄く、とても明るい色の目をしている。決然とした人物。制服の上着のボタン穴に、私が今まで見たことのない勲章の綬がかかっている。『あれは第二級鉄十字勲章だ。前線に行っていたに違いない』とヴァーレンティーンは言う。（ヴァーレンティーンはドイツ人の看護人である。後から聞かされたことだが、ヴィルツは所属していたＳＳの部隊がラップランドに出動した際、前線勤務不能となった。またダッハウは、彼が赴いた最初の強制収容所である）。

はや二日目にして、ヴィルツが普通のＳＳ医とは異なる点が他にもあることに気が付いた。診療室でのこと、彼の首の血管は怒りに膨れ上がり、その語気は恐ろしいほど鋭かった。彼の前には、ハイニが気を付けの姿勢で立っていた。（ハイニは内科の若い看護主任で、任された患者を無責任にもなおざりにすることがよくあった）。

『昨日、私が命じた注射をしなかったのは、なぜだ？』。『中尉殿、病棟ですることがありすぎまして、手が回りませんでしたので……』と、ハイニは何とか言い繕おうとした。しかしヴィルツは途中で遮った。

＊しばさき　まさこ：大阪国際大学人間科学部教授〈2005.８.29受理〉

『あの患者が死んだかもしれないということが、分からないのか。責任感というものが、君にはないのか』。

こんなことは初めてだ。回診のときも、ヴィルツは他の医者とは違っている。毎日、病床を一つずつ見てまわり、患者に優しい言葉をかけることもある。それどころか、私は現場に居合わせたのだが、ヴィルツは老いたポーランド人とポーランド語で話をしようとしていた。他のＳＳ隊員なら尊大なため、そのようなことは思い付きもしなかっただろう」。

こうしたヴィルツの異例の回診に私は付いてまわり、ベッドの前で彼がこれまで与えた指示を手短に報告し、新たな指示をきちんとメモした。怠けるのみならず独断的な看護主任のハイニには、処方を必ず実行するよう念を押した。私がなぜそうしたのか、ヴィルツには知る由もなかったが、彼は私のことを誠実な書記として評価するようになった。

ヴィルツが私たちの科にいた期間は短い。私の記録には、以下のように書かれている。

「ヴィルツは別の科の担当になった。回診の途中、彼に会ったが、そのとき私たち二人の他に誰もいなかった。私は威儀を正した。

『内科の様子はどうだね、ラングバイン？』。

『博士がおられたときはよかったのですが、今はもうそれほどではありません』。ヴィルツが私の横を通ったとき、彼が赤くなっているのに気が付いた。首と耳が真っ赤になっていたのだ。囚人に褒められて嬉しいのだろうか。変わっている。彼は他の連中とは違う。

その後、ヴィルツは転勤になった。事務室では、ノイエンガメ収容所へ行ったと言われている」。

私がアウシュヴィッツに来て３週間もたたないうちに、新しい医務長が来るということを知った。ドイツ人囚人の書記を欲しがっていると言う。囚人病棟の書記でドイツ人として通っているのは、ダッハウから一緒にアウシュヴィッツへ移されたカール・リルと私だけで、他はたいていドイツ語ができる若いポーランド人だった。リルと私はＳＳの看護室へ行くよう命じられ、事務室で待たされていたが、そこでは二人のＳＳ隊員も、何をすることもなく座っていた。その後、起きたことを、私は次のように記録している。

「ドアが開くと、ＳＳ隊員がパッと立ち、直立不動の姿勢をとった。士官帽をかぶった背の高い男が入ってきた。何とそれはダッハウで会ったヴィルツではないか！　彼の方もすぐに私に気がついた。（彼に付き添っていた）曹長が何か言う間も与えず、ヴィルツは大声で叫んだ。『ラングバインじゃないか。こんなことがあるなんて！　一体どこから来たのかね』。それからダッハウの内科で彼が治療していた慢性胃カタルの患者や、重い関節リューマチの患者はどうなったかと私に尋ねた。最後に曹長に向かって、「ラングバインが私の書記だ」と言うと、ヴィルツは再び出て行った。『あの医務長がここに来て以来、今、囚人と話したほど、私にしゃべってくれたことはない』。ＳＳ隊員の一人はすっかり感情を害して、腰を下ろした」。

こうして、ヴィルツ医務長の下で私の仕事が始まった。それは1944年８月25日に私がノイエンガメへ移るまで、つまり私がチフスにかかった時と営倉入りになった時の二度の中断を除いて、ほぼ２年間続いた。

ヴィルツに関する記述としては、ヘスがクラクフ刑務所で作成したものがある。「ヴィルツは戦前、バーデンの奥地で開業医として大規模の診療所を持っていた（私がよく書いたヴィルツの身内の宛名は、「メルヒンゲン、オスターブルケン局」である）。

ヴィルツは戦争の初期に医師として武装ＳＳに招集され、様々な部隊に同行して前線へ投入された。身を粉にして働いたため、フィンランドで重い心臓病にかかり、前線では勤務できなくなった。それで彼は強制収容所の監察に回され、アウシュヴィッツへ来たのである。

ヴィルツは有能な医師で、責任感がきわめて強く、非常に良心的で慎重だった。医学のあらゆる分野に関する広範囲の学識を有し、医療の知識と技能を高めようと常に努力していた。しかし、彼は非常に軟弱でお人よしだったので、自分を支えてくれる強い後ろ盾が必要だった。与えられた命令や指示のすべてに、最新の注意を払って従った。疑問のある場合には、それでよいのか、いつも確認した。

たとえば、政治部のグラープナーが出した粉飾された処刑の指示を実行する前に、ヴィルツは原則的にいつも私のところへ直接、確かめに来た。そのためグラープナーはいつも腹を立て、ヴィルツのことをひどくうらんでいた。ヴィルツは、自分に求められている殺人と、医者としての良心を合致させられなくて、とても辛いと私によく訴えた。ロリングや帝国医のところで別種の医療活動をすることを彼は何度も願ったが、聞き入れられなかった。私はＳＳ国家長官が下された命令は何としても必要なのだからと言って、ヴィルツを繰り返し励まさなければならなかった。ユダヤ人絶滅のすべてに対して彼は良心が咎め、そのことを私にそっと打ち明けることもよくあった」。

こうした性格描写に付け加えて、ヘスはこうも述べている。「ヴィルツは建築施工部と絶えず闘っていた。衛生施設の改善と新設を迫り続け、失敗があると分かると決してなおざりにせず、直すまで要求し続けたからである」。

建築施工部とひっきりなしに文書でやり合っていたことを、私もよく覚えている。私はしばしばヴィルツに建築関係の欠陥を報告し、建築施工部が約束を守っていないことを思い出させた。とうとうヴィルツは私たちの任務のために建築の専門家を請求した。そうすれば種々の囚人病棟における簡単な工事を直接、彼の事務所で準備できるからである。こうしてやって来たのが、チェコスロヴァキア出身のユダヤ人エンジニア、ハヌシュ・マイアである。彼は収容所解放後まで生き延びた。

ヘスによる性格描写では、さらにこう書かれている。「ヴィルツが全収容所で最高の医師であることは、ロリングでさえ嫌々ながら認めていた。私は収容所組織に十年間勤めたが、ヴィルツ以上の医師は見たことがない。彼は囚人に対して礼儀正しく応対し、公正であろうとした。私見では、彼は親切すぎることがよくあり、特に何でも信じすぎていた。人のよさが囚人、特に女性の囚人に利用され、彼が不利益を被ることもあった。ヴィルツは囚人医をとりわけ優遇し、私の印象では同僚として扱っていた。それは収容所にとって、きわめて不都合であった」。

ヘスはヴィルツについての記述を、以下の言葉で締めくくっている。「彼はとても仲間思いで、仲間からも大変好かれていた。自分の所に来る者は誰でも援助した。彼は医師と

して、ＳＳの家族も大いに助けた。皆から信頼されていた」。アウシュヴィッツにいた他のＳＳ指導者について述べるとき、ヘスが賞賛することは稀である。

政治部長のマクシミーリアーン・グラープナーはヴィルツと反目し続け、他のことに関してはヴィルツを何とか悪人に仕立てようとしていたが、ポーランドでの拘留中に記した文書では、次のように認めざるを得なかった。「ヴィルツは収容所から伝染病を一掃した唯一の医師とみなされており、一般に収容所最高の医師と考えられていた」。

他の人の証言もある。たとえば収容所指導者のフランツ・ホーフマンは、こう表明している。「医師が収容所で選別を実施するときは、いつも上からの命令が来ていました。私はその証拠を出せます。ヴィルツ医務長との会話から、そのことを知ったのです。彼とはダッハウにいたときから、とても親しくしていまして、腹蔵なく語り合ったものでした。ある日、ヴィルツがやって来て言いました。『フランツ、今日またもやとんでもないことがあってね。ヘスの所まで行かなくちゃならなかったんだ。その前にアウマイアーやグラープナーとも話をした』。ヴィルツは囚人の選別に反対でした。医者がいるのは、選別を実施するためではなく、患者のためだと言うのです。結局のところヴィルツは二、三日後、『直接ベルリンから命令が来た以上、やらざるをえない』と私に告げました」。

ＳＳ看護室で働いていた看護婦のマリーア・シュトロームベルガーは、ワルシャワで行なわれたヘスに対する裁判で証人となり、1943年初頭、自分が密告され、ヴィルツに注意されたときのことを証言した。囚人の扱いが優しすぎると言う声があちこちから上がっている、とヴィルツは彼女を咎め、「あなたには囚人ブロックへ行ってほしくないから、警告しているんです」と言って、言葉を切った。それに対してシュトロームベルガーは、私はＳＳ隊員でもなければ監視人でもないので、もし私の行動が批判を引き起こすなら、どうぞ配置換えをしてください、と返した。するとヴィルツは、彼女の肩を叩いて言った。「マリーアさん。ここに残ってください。あなたが今後どんな中傷を受けても、私があなたを守りましょう」。

二年間いっしょに働くことを通して、私はヴィルツを他のどのＳＳ隊員よりも詳しく知るようになり、意図的に彼への影響力を得ようとした。その際、仕事関係がもたらす状況が役に立った。

ＳＳの制服を着た医師は、もし怠惰でも無関心でもなければ、ともに考えてくれるような秘書を探す。囚人服を着た書記は、もし利己的でも冷淡でもなければ、その役目が与えてくれる可能性をうまく利用する。頭脳明晰な囚人なら、誰でも看守を凌駕できた。囚人はその立場から生じる数々の問題に絶えず取り組んでいるが、看守は別の問題に気を取られているからである。毎日、仕事で会っていると、囚人が意図するなら、人間的な繋がりが生まれることは、諭そうが脅そうが、結局は避けられなかった。ヴィルツと私の関係は決して唯一の例外ではない。たとえばコゴンは、「賄賂だけではなく、直接の政治的影響によっても、上級のＳＳ指導者を囚人の自主管理の道具にできることが時折あった。そうした事例はきわめて少なく、大きな危険を伴っていた。もっともうまく行くのは、ある種のＳＳ医が相手のときである」と書いている。コゴン自身、ブーヘンヴァルトでＳＳ医の

秘書だったので、自分自身の体験に基づいてこのように語っているのである。ブーヘンヴァルトで医者の書記をしていたヴァルター・ポラーや、マウトハウゼンの医務長の囚人書記だったエルンスト・マルティンも同様の経験をしている。ただし私の知る限り、ヴィルツほど囚人との関係を深めたＳＳ医はいない。

ヴィルツの場合、数々の要因が重なっていた。まず彼は強制収容所の犯罪に反対だった。これはダッハウで十分調べることができた。またヴィルツは仕事熱心でもあった。そのため、事務所には正式の書記としてリヒターＳＳ伍長がいたにもかかわらず、この男はやる気がなく知的にも劣っていたので、秘密の通信のためにもう一人別の秘書を探させたのだ。そのうえヴィルツは知識人だったので、他のＳＳ指導者から非難されていた。「あなたも例の国際的なインテリ野獣だ！」といった発言を聞かされた、と彼は書いている。こうしたことすべてに助けられて、私は思い通り彼との間に個人的な関係を築き、それを収容所のために利用することができた。確実にパートナーとして活動し続けられるようにするため、私は二つの原則を厳密に守った。第一に、与えられた機会を私利のためには決して利用しなかった。こうして道徳的な堕落を防いだので、ヴィルツは感心していた。次に、私は重要な行動はすべてエルンスト・ブルガーに話し、後には抵抗運動指導部と協議した。そのおかげで、絶滅機構において特権を持った手先にならずに済んだ。こうしたことは、最初の数週間のうちにヴィルツと交わした会話が証明してくれる。私の記録には、以下のように記されている。

ヴィルツが「再び机の方へ向かい、腰を下ろした。そして探るように私を見つめた。『ラングバイン、君を信用してもいいのだろうか？』。

『博士、この収容所にいる囚人のためになることなら、できる限り博士をお助けいたします。それ以外のことを私から求めたりは、なさらないでしょう。私はいつか収容所から出たいとは思っていますが、自尊心を失うようなやり方は御免こうむります』。

これまでこんな話はしたことがなかった。それからヴィルツは二、三の些事を口述し、それが終わると、『これでいい』と言った。

私はとても危険な道をさらに一歩踏み出した。夜、エルンストにヴィルツとの会話のことを話した」。

別のことを扱ったときに述べたことだが、この危険な道を使って、病棟のために便宜を図ることができたのである。

アウシュヴィッツのＳＳ隊員の中でも、おそらくもっとも興味深いこの人物を一面的に描くことは避けたいので、ヴィルツを知っていた他の囚人の記述を引き合いに出しておこう。

ヴラーディスラフ・フェイキエルはヴィルツについて、以下のように記している。「新医務長の到着とともに、囚人病棟では異変が起きた。新医務長となったのは、ダッハウから来たＳＳ少佐のＥ・ヴィルツ博士である。ダッハウで看護人として働いていたオーストリア人とドイツ人の共産主義者が数十人、ヴィルツと一緒にやって来た。（大したことではないが、フェイキエルはここで誤解をしている。私たちはダッハウのときからヴィルツを知ってはいたが、アウシュヴィッツに一緒に来たわけではない。ヴィルツは一時、ノイ

エンガメにいたからである。私たちは17人だけで、全員が共産主義者というわけではない。ただし、よく知られた人物は共産主義者だった)。この囚人たちは互いにとても息が合っていて、陰謀や収容所生活の経験を積んでいた。ナチではあったけれど、犯罪を激しく憎んでいた医務長は、囚人たちを優遇した。彼らはアウシュヴィッツの雰囲気にすぐ馴染み、ポーランド人の民主主義者のグループと連絡をとり、医務長の援助も借りて、一種の革命を看護室で起こした」。

このフェイキエルの文章は、ヴィルツが戦後に書いた弁明書が正しいことを証明してくれる。ヴィルツは次のように記していた。「いかなる国籍を持とうと、犯罪者ではないのに政治的理由で拘禁されている人たちが、収容所では重罪人に監視されていたのは、全くとんでもないことである。これら重罪人に代えて、まっとうな性格で罪を犯していない、いわゆる政治犯――その中にはユダヤ人も含まれる――を入れるよう、私はいつでもどこでも提案した。この提案が抵抗にあったのは、政治的敵対関係が強まってしまうと恐れられたためだ。私は、看護室や治療室で犯罪者の囚人が指導的地位につくことを許さなかった」。

アウシュヴィッツから移ってきたばかりのヴィルツに、フェイキエルが初めて会ったのは病棟視察のときで、その模様は次のように描かれている。「ヴィルツは組織や秩序を観察し、患者と話をし、医師には治療法を尋ねた。私が受けた印象では、彼は他の普通のＳＳ隊員とは違っていた。伝染病科の視察後、ヴィルツは私を呼んで、この科の患者の栄養補給のために、肉の缶詰を数百個、受け取るよう命じた。およそＳＳ隊員がするとは思えないこの贈り物に、私は仰天してしまった。夜に缶詰を取りに行き、ブロックまで運んできたものの、これは一体どういうことなのか、私たちはあれこれ考えざるを得なかった。どうしても怪しげに見えたからである。

私はＳＳを信頼したことがなかった。ＳＳに善意や好意があるなどとは思っていなかった。フェノールやガスで病人が殺されるのを見た後では、ＳＳの医務長が病人の栄養のために缶詰を送るとは、到底信じられなかったのである。これは病人を厄介払いするためにヴィルツが考えた新しい方法ではないか、と私は思った。缶詰は発疹チフスの患者専用であって、他の患者や看護人に与えてはならない、とヴィルツがことさらに命令したので、私の疑惑は一層強くなった。

私は疑念に苛まれた。友人のスタニスラフ・グローヴァ、スタニスラフ・クロジンスキー、タデウス・シマンスキーと一緒に、どうすべきかを討議した結果、慎重論が勝った。私たちは缶詰を手元に置き、後でこっそり捨てるつもりだった。しかし夜のあいだに数名の患者が突進し、いくつか缶詰を平らげてしまった。翌朝、食べた連中は元気だった。私たちは中毒の症状が出ないか、夜まで待った」。何の症状も出なかった。それでようやく缶詰は配布されたのである。

フェイキエルはフランクフルトの判事の前で、ヴィルツは「知性豊かな医師で、決して悪人ではありません」と語り、さらに「薬を持ってきてくれましたし、発疹チフスの撲滅法も心得ていました」と述べた。ヴィルツの直前に医務長をしていたクルト・ウーレンブロークは、発疹チフスを撲滅するのに、まだシラミと一緒に患者までガス殺にするという

方法を取っていた。最後にフェイキエルは、1943年秋、地下運動に加わっていた容疑で拘留されていた営倉から、ヴィルツが救い出してくれたことにも言及した。

アリーナ・ブロイダは、私も関与していたのに、すっかり忘れてしまっていた出来事を思い出させてくれた。彼女が医師として働いていた第10実験ブロックでは、ブロック最古参のマルギッドが権力を乱用し、患者を殴っていた。ブロイダからその話を聞いた私は、ヴィルツがブロイダを呼んで状況報告させるように仕向けた。その後、ヴィルツはブロック最古参を罷免した。ブロイダはユダヤ人だったので、彼女にその仕事を引き継がせることには、ためらいがあった。そのためヴィルツは最古参には誰も任命せず、最古参代理を主任医師、つまりブロイダに任せるという指示を即座に出したのである。

ヴィルツがタブーを破り、ユダヤ人の医師を病棟の主要な地位に就かせ、収容所最古参にもしたことは、すでに別のところで述べた通りである。

ＳＳ看護室で仕事をしていたポーランド人の囚人、テディ・ピエトルジコフスキーは、帽子を脱がなかったという理由で、ＳＳの監視人、イルマ・グレーゼにムチで打たれたことがある。その様子を見ていたヴィルツは、ピエトルジコフスキーのいる前でイルマ・グレーゼに、「私の部下を打つな！」と注意した。

ポーランド人のイレーナ・イドコヴィアクは、19歳で両親とともにアウシュヴィッツへやって来た。両親の死後、ヴィルツは家事手伝いをさせると言って、イレーナを収容所から救い出した。戦争が終わってからも数ヶ月間、彼女はヴィルツ家に留まり、1945年秋、次のように陳述した。「私はここに（宣誓した上で）、ヴィルツ博士がいつも人道的に囚人のために尽力し、伝染病と懸命に戦い献身的に看護して、何万もの囚人の命を救ったことを証言いたします。ヴィルツ博士の看護はとても手厚かったので、ＳＳ隊員の夫人方は、ヴィルツ先生は自分たちより囚人のほうが好きなのだ、と文句を言うほどでした。今一度、強調しておきますが、ヴィルツ博士については、よいことしか仲間の囚人から聞いたことがありません」。

私と一緒にダッハウからアウシュヴィッツに来た共産主義者のカール・リルは、私がアウシュヴィッツから移動させられた後、ヴィルツの書記をしていた。フランクフルトの陪審裁判所で裁判長からヴィルツについて尋ねられたとき、リルは以下のように答えた。

リル：ヴィルツ博士のことはダッハウにいたときから知っていました。あの人は本当の医者のように、囚人の患者を治療していました。ダッハウにいたときから、きちんと仕事をする努力をしていたのです。

裁判長：彼がアウシュヴィッツで改善したことがありますか。囚人の患者に恣意的な注射をするのを止めたのは彼ですか。

リル：それは間違いなく、ヴィルツ博士のおかげです。

裁判長：ヴィルツと医師のエントレスのあいだに、対立がありましたか。

リル：もちろんです。エントレスは残忍な医者でしたから。

裁判長：当法廷でヴィルツを傲慢だと評した人が何人かいました。あなたの印象では、そうした傲慢な素振りは単なるポーズだったのかもしれない、とおっしゃるのです

ね。
リル：ええ、そのように感じました。

期待を何度も裏切られながら、ヴィルツは絶えず上司に警告を与え続け、定期的にベルリンに報告していた。ヴィルツの報告にサインしなければならなかったヘスは、次のように書いている。

「ＤⅢと帝国医師ＳＳに対する医療月刊報告で、ヴィルツは正確な健康状況、つまり全衛生施設の状況を詳細に記し、生じた問題を歯に衣着せず明白に描き出した。ヴィルツはこの報告で毎回、収容所全般のひどい状況――後には『恐ろしい』と呼ぶべき状態になった――の除去を訴えた。彼が書いた報告書を読めば、誰でも収容所の様子をありありと想像することができた。DⅢないし帝国医師ＳＳに対する口頭報告でも、ヴィルツは遠慮会釈なく、容赦なかった。たとえば死亡率が高まり憂慮すべき事態になったとき、ポールからDⅢを介して命じられた伝染病の特別報告書を作成する際、ヴィルツはそのような事態を引き起こした原因を特に露骨に指摘したので、私ですら大げさすぎると思ったほどである。しかし私は、彼がそのような報告を行なうことを許可した。こうしたアウシュヴィッツの医療報告によって、目に見える援助が得られたことはなかった。それでも、指導的な上級職の誰もがアウシュヴィッツ収容所の惨憺たる状況を知ることとなり、国家保安本部を含め、上官はもはや何も聞かされていないとは主張できなくなったのである」。

こうした月間報告書をヴィルツは私に口述筆記させただけでなく、資料をまとめることも私に任せた。各収容所からの報告に含まれた不正確な点や粉飾については、私の方から彼に注意を促した。私が指摘した問題を、ヴィルツが報告書で取り上げることもよくあった。このような協力がすっかり当たり前になっていたので、あるときなど、サインだけすればよいように「いつも通り」資料に基づいて報告書をまとめるよう、ヴィルツは私に命じた。送付の締め切りが迫り、他に仕事を抱えていたからである。その報告書は通常よりきつめの表現が使われていたのだが、ヴィルツは訂正せずに発送した。

ヴィルツは後に、こうした二人の共同作業について次のように書いている。「仕事を始めた当初より、信頼の置ける囚人に統計数値つきの報告書を口述筆記させた。そうすることで数値が広く知られるようになればよいと、密かに願っていた。毎月作成する報告書でも、事実通り収容所の状況を述べた」。

本部にこれほどあからさまに知らせてよいのかという疑念を、私は払拭しなければならなかった。収容人員の超過が弊害を生んでいるのなら、場所を空けるためにもっと多くの人をガス殺するといった、好ましくない反応を引き起こす可能性もあったからである。この点については、私たちの抵抗組織の指導部で協議し、結局、「潤色を加えた報告の方が真実ありのままの報告より、悪い結果を生むだろう」という結論に達した。何の粉飾も行なっていない報告が持つ効果について、私たちは幻想を抱いてはいなかった。ヴィルツの援助請求に対して、ベルリンからはいつも無内容の返事しか来ないことを知っていたからである。それゆえ、ヘスの次の言葉は正しいと認めざるを得ない。

「彼(医務長の上司、ロリング博士）はたいていアウシュヴィッツにいたが、大々的な視

察に基づき何かを実施したことはなかった。アウシュヴィッツで衛生や医療の面で本当に何か改善されたとしたら、それは収容所の医師たちが自ら行なったのである。ロリングからは援助も理解も全く得られない、とヴィルツは私によくこぼしていた」。

とはいえ、戦局がドイツにとって不利となり、連合軍がアウシュヴィッツの絶滅システムについて広めるニュースに対して、ドイツが神経を尖らせるようになると、ヴィルツの報告書が少なくとも何らかの効果を発したと思われる。

絶滅収容所のどの医師にとっても、ＳＳ指導部から課せられた最大の重荷は、ガス殺される者を決める選別だった。その際、アウシュヴィッツで勤務する全医師の長として、ヴィルツがどのように振舞ったかは、数々の証言によって裏付けられる。

彼の友人、ホルスト・フィッシャーの法廷での証言によると、ヴィルツは1943年春、移送されてきた人の選別は、収容所指導者やその部下ではなく、ＳＳ医が責任を持って執り行なうこととした。そのようにした理由は、ヴィルツの観察したところでは、収容所指導者は選別が厳しすぎ、労働可能なものもガス室送りにするからだという。ヴィルツは自分の弟に対しても、同じ理由を述べている。弁明書の中で、「私は部下の医師たちに、大変な重責を課さなければならなかった。労働可能か否かの決定は医師に尋ねるべし、と収容所指導部に要求したからである」とヴィルツは書いている。

彼はそうした重荷を部下だけに課したわけではない。自分自身にも他のＳＳ医と同様、順番に降車場での業務を割り当てるよう、彼は強く主張した。所用でその仕事をこなせなかった時など、別のときに行なっていた。

収容所における選別に対するヴィルツの態度は、彼が1943年11月16日にゴレシャウ外郭収容所の衛星係に宛てた文書から読み取ることができる。その冒頭で、「この前の病人移送で引き渡された囚人たちが受けていた処置は惨憺たるもの」であったとヴィルツは確言し、「とくに負傷した囚人はひどく汚れた包帯をしたままで、傷口は放置され汚くなっていた」、「囚人に訊くと、包帯の一部は10日間も交換されていない」と続けている。ヴィルツはその文書を次のように締めくくっている。「かかる事態の全責任は貴兄にあるとみなし、再びこのようなことが起きた場合には、厳罰に処する所存である」。囚人に対する処置が理由で、このような警告が行なわれることなど通常はありえず、また囚人の申し立てを引き合いに出すことも、きわめて稀にしかなかった。この文書が証明しているように、ヴィルツは外郭収容所から病人として引き渡されてくる囚人の殺害を食い止めたかったのである。もしそうでなければ、そのような囚人の境遇など、彼が知る由もなかっただろう。ヴィルツに命じられて同様の文書を何度も口述筆記したことを、私は覚えている。

何年もたってから、ヴィルツがアウシュヴィッツから身内へ書き送った手紙を閲覧することができた。以下の引用から、彼の人柄を窺い知ることができるだろう。

1943年９月22日、アウシュヴィッツより妻に宛てた手紙。「メッケ（ＳＳ中佐で管理部長）がベルリンから帰って来た。アウシュヴィッツに戻って来られたのがよほど嬉しいらしく、ここを二度と離れない、と言っていた。こんな輩もいるとは！」。

1944年11月29日、アウシュヴィッツより妻に宛てた手紙。「このおぞましい仕事をもう

せずに済む。それどころか、そもそもこんな仕事がなくなってくれた。愛する人よ、それがどれほど嬉しいことか、想像できますか」。丁度この頃、ガスによる殺害が中止されたのである。

1944年12月13日、アウシュヴィッツより両親に宛てた手紙。「御想像とは異なり、アウシュヴィッツにおける目下の大変革は、私がなし遂げたものではありません。最高決定機関が命令を下したのです。私の力はとてもそこまで及びません。唯一、私の功績と呼べるのは、事態を打開するきっかけを与えたことでしょう。ありとあらゆる機会を捉え、私が接することのできる高位の人を見つけては、全過程が非人間的で常識はずれで本当に品位を傷つけると指摘してきたからです。またこの途方もない重荷をきわめて露骨に述べて、事態が変わらなければ恐ろしい戦争に加えて、ドイツ国民全体にこれまでも今後もどれほどの負担になるかを人々に示そうと、あらゆる方面で努めてきたからです。

ベルリンに戻ってきて、疑問の余地のないこの明白な決定を聞くことができ、さらにあの種のことが完全に拒絶され、それどころか禁止されたという知らせをアウシュヴィッツにもたらせるのは、私にこの上ない満足感を与えてくれます。私たちの間では安堵の吐息が広がっています。どうしてかは申し上げられません。父上は私の考えを御存知でしょう。罪責は否定できません……」。ヴィルツは「この手紙は保管しないで下さい」との注意書きを付していた。

にもかかわらず、この手紙はヴィルツの父親の手元と、クラクフの抵抗組織の二箇所で残っている。ヴィルツから口述筆記を命じられた書記のカール・リルが、コピーを抵抗組織に渡したからである。

また別の折も、ヴィルツは介入して助ける可能性がある時は、責任の重圧を自ら担った。彼は弁明書で、そのような自発的行動に言及している。「ゲシュタポによって即決軍法会議がしばしば行なわれた。判決後、有罪となった者はほぼ100パーセント射殺された。囚人からこの軍法会議のことを指摘されてから、心理的症例を決定する医師として会議に参加できるよう私は要請した。審理の対象となるのは、サボタージュ容疑のポーランド人がほとんどだった。私の医学的判断によって、死刑判決をかなり防げた。被告の身体的状態ゆえに労働不能であると指摘することもよくあった。そうなると、被告は囚人として収容所に入れられ、死を免れたのである」。

ヴィルツの介入で救われた人がいることは証明できる。ゲシュタポに捕らえられた囚人が即決裁判を待つ第11ブロックで書記をしていたポーランド人、ヤン・ピレキの観察によると、ヴィルツが出席していた即決裁判では、射殺の判決を受ける囚人の数が、通常より少なかったという。ピレキは囚人を前に呼び出す役目を負っていたので、ヴィルツが囚人に有利な影響を与えているところを目にすることができたのである。ピレキの婚約者がゲシュタポに引き渡されたとき、ヴィルツが次の裁判に出席するように仕向けてくれ、と私は頼まれた。またピレキは婚約者に、法廷での振舞い方も教えた。彼の観察によると、きちんとしたドイツ語を使って大きな声でハキハキと答え、ＳＳ隊員の顔を直視する人は、処刑を逃れるチャンスが一番高かった。実際、ヴィルツはその裁判に出席し、彼女は射殺

を免れ、収容所が解放されるまで生き残り、ピレキと結婚できたのである。ヴィルツは少なくとも二、三の死刑判決を阻止するために、自ら即決裁判の共同責任を負った。

ヴィルツについては否定的な意見も存在する。私が耳にしたものはほとんど、彼と個人的に接したことがなく、制服や役割しか知らない人や、よくあるように法廷で、すでに死んだ人に罪をなすりつけようとしたＳＳ隊員の発言である。

私はしばしば自問するのだが、どうしてこのような人がＳＳの制服を着るようになったのだろうか。ヴィルツは一度、「私は国家社会主義者ではない。私は医者であり、医者である以上、個人主義者だからだ」と、私に言ったことがある。個人記録からは、彼が1909年ヴュルツブルクに生まれ、1933年５月１日にＳＳに入隊したことが分かる。彼は生家で国家社会主義の精神に基づいて育てられたわけではない。私がそれを知ったのは、戦後になってからではなく、数々の私信を通じてである。ヴィルツは弁明書で次のように書いている。

「1930年の夏、私は大学の医学部に入り、1932年から33年にかけてヴュルツブルクで前期過程試験を受けた。さらに勉学を続けるためには政治的適格証明書が必要だったが、社会民主党に共感していたので、私の証明書には不適格と記されていた。退学処分にして勉強を止めさせるという脅しをかわすために、1933年６月、私は国家社会主義ドイツ労働者党への入党を申請した。入党申請できるのは、同時に突撃隊への入隊申請をした者に限られていた。突撃隊では６月から７月の約４週間だけ勤務についたが、入隊は認められなかった。実家はヴュルツブルク近郊のゲロルズハウゼンだったので、そこで突撃隊の勤務を行なったが、大学での勉強を続けるために、1934年10月、ヴュルツブルクのＳＳ衛生部隊への入隊を申し込んだ。ＳＳの志願者、入隊候補者として、1935年１月まで衛生部隊で勤務し、国家試験の準備と職業教育を受けるため休暇をとった。したがって私は依然として、ＳＳの入隊候補者なのである」。

上記の日付が、私が覚えていた彼の個人調書の日付とずれているため、この弁明書には疑念を抱いていた。それゆえ後に彼の弟に尋ねたところ、制服が格好よかったのでエードゥアルトはＳＳに入る気になった、と答えてくれた。当時は大学で勉強して出世しようと望むなら、ナチ党の何らかの組織に加入しなければならなかったが、突撃隊は余りに粗野で不快だった、とのことだ。

ヴィルツがアウシュヴィッツの医務長に招聘されたのは、医師として名声を博していたからである。どの収容所でも、上に立つ医師は発疹チフスに頭を悩ませていた。兵士や民間人にも伝染するからだ。しかしヴィルツの前に医務長を務めた人は皆、発疹チフスの撲滅に失敗した。そうでなければ病気になって脱落した。彼が書いていることだが、アウシュヴィッツの医務長に任命された際に、他のことは構わなくてよいから、部隊における発疹チフスと腸チフスの撲滅に専念するよう、ロリングに指示されたという。ヨハン・シンドラーによると、約50人の兵士が発疹チフスに罹患していた。彼は衛兵隊の曹長だったので、全体を概観できたのである。

後になってヴィルツが語ったことだが、絶滅システムに直面した彼は、絶望してヘスのところへ行ったものの、アウシュヴィッツはまさに絶滅収容所なのだから、治療などどう

でもよい、とヘスに言われてしまったそうだ。死者数とひどい衛生状態を目にした当初は、自殺しそうになったという。

ダッハウでナチスの強制収容所に始めて直面したとき、ヴィルツはかねてより知っていたミュンヘンの聖職者、ヴォルフラム・デンザー神父に助言を求めた。神父からは、強制収容所での仕事を続け、医療の分野で力の及ぶ限り善い行いをするのがあなたの義務だ、と諭された。こうした経緯については、戦後、神父が事実だと認めている。アウシュヴィッツで日々、大量殺戮が行なわれているのを目にして、ヴィルツは再び助言を求め、今度は父親に相談した。父親からも、今いるところに留まり、できるだけ援助を続けるよう、勧められた。息子に正しい助言を与えたのかという問いに、この父親は高齢になるまでずっと苛まれており、私に何度もその答えを求めた。

デンザー神父の証言もヴィルツの父親の助言も知らなかったときに作成した記録の中で、私は決定的瞬間を記述している。それは黒壁での射殺について私が与えた情報に基づき、ヴィルツが政治部長に抗議しに行ったときのことである。表面上のきっかけは、射殺された囚人について、ベルリンへの報告では、病名を捏造して「病死」となっていたことだった。ヴィルツは当時、中央からの命令に応じて、死者数の減少に骨を折っていた。以下は私の記録である。

「昨日ヴィルツはとてもイライラしており無愛想だった。今日、彼から口述筆記を頼まれたのは、上司のロリングに宛てたアウシュヴィッツからの異動申請書だった。配置転換を願う理由としては、政治部長のグラープナーＳＳ少尉が、ヴィルツの振舞はＳＳ指導者としてはふさわしくないと、収容所所長の前で評したことが挙げられていた。きっと第11ブロックにおける死者数の報告に関係しているに違いない。

私はタイプライターのキーを叩きながら、あれこれ考えずにはいられなかった。ＳＳの内部事情に関することなら、いつもＳＳ曹長のリヒターが書くのに、ヴィルツはこの文書をわざと私に口述筆記させているのだろうか。私たち囚人に、文書の内容を知ってほしいのだろうか。彼はいまだにヒトラーの勝利を信じているのだろうか。彼の異動は、私たちの組織にとって大変な痛手だ。後任がどんな人物かは分からないが、ヴィルツほど御しやすくないことだけは確かだ。ダッハウとアウシュヴィッツで知り合いになったＳＳ医はもう優に20人を超えるけれども、ヴィルツほど思い通りに動いてくれる医師はいなかった。

私はヴィルツが部屋で一人になるときまで待って、文書を持って行った。彼はいぶかしげに私を見つめた。

『ＤⅢへの文書です、博士』。彼はうなずくと、万年筆を手に文書を一読した。そしていつものように大きな斜め文字でサインした。顔を上げたとき、私がまだ部屋に残っていたので驚いたようだった。『書いてもらいたいものは別にもうないので、帰ってよろしい』。

『率直に申し上げてよろしいでしょうか、博士』。彼は後ろに寄りかかり、私は彼の目の前に立った。『この文書を送付しないで頂きたいのです』。

『私はどうしても我慢できないんだ』。

『特に我々囚人のことを考えて、お願いしているのです』。私たちは長い間、互いを見

つめ合っていた。こう言われるのを彼は望み、期待していたのだろうか。それを知りたかったが、分からなかった。『いつでも率直に話してもらっていい、ラングバイン。わざわざ訊く必要はない』」。

ヴィルツがあの文書を送ったのか否かは、知らされなかった。いずれにせよ、彼は留まった。これまで何度も引用した弁明書の以下のくだりは、明らかにこのときの対話に関連している。「私は収容所の囚人たちから何度も、『仕事を止めないで下さい。よそに移らないで下さい。さもないと、私たちの命を救ってくれる人がいなくなってしまいます』と強く懇願された。何万人もの生命を守るというこの使命を、エゴイズムや自分の健康を理由に投げ出せば、深刻な良心の葛藤に陥ったことだろう」。

ヴィルツに文書を出さないでほしいと言ったとき、私は彼の倫理的重責など思いもよらず、ひたすら自分たちだけのことを考えていた。

ヴィルツは四方八方から同じ助言を受けていた。彼ほどの強い意志と高い知能があれば、どのような口実であれ、アウシュヴィッツから逃げ出す方法を、きっと見つけられただろう。しかし彼は留まり、好ましい結果を生み出したのだ。病棟において毒物注射による殺害は中止されたし、彼の部下のうちきわめて危険な殺人鬼――エントレスとクレール――は、基幹収容所の主要な地位から外された。病気の伝染は抑えられたし、食事の管理も改善された。責任感のある囚人が囚人病棟の重要なポストに就いたし、囚人医に医療が任されるようになった。病棟に収容する際に囚人の虐待が判明した場合は、対策がとられた。最後に、二人目の所長、リーベヘンシェルを動かして改革を実行させ、そのおかげで数々の障害が除去されたり軽減されたりした。こうしたこと一切が、ヴィルツの留任を意義あるものにしているのである。

しかしその全期間を通じて、ヴィルツはアウシュヴィッツでもっとも地位の高いＳＳ医として、絶滅プログラムで全ＳＳ医に課せられた任務を果たしてもいた。彼にしても、アウシュヴィッツが醸す殺人的雰囲気の影響から逃れることはできなかった。ヴィルツの意気が萎えてしまうかもしれないと感じた私は、彼を勇気付けるために、1943年のクリスマスの折、ズビシェクに頼んで装飾文字でカードを作ってもらった。そこには、「あなたのおかげで93000人の囚人の生命が救われました」と書かれ、それに続いて「一人の人間の生涯など、ああ、儚いもの。けれども一人の人間の運命は、とてつもなく重い」というグリルパルツァーからの引用が記されていた。ヴィルツの家に出入りを許されていた伝令のエーミールが、このカードをそこのテーブルの上に置いた。93000という数を私がはじき出したのは、もし1943年の死亡率が、ヴィルツが来る前の1942年夏と同じぐらい高かったなら、それぐらい死者数が増えていたはずだからだ。これはもちろん理論上の計算に過ぎないが、効果は抜群だった。ヴィルツはこのカードを父親に渡していたのである。戦争が終わり、ハンブルクでイギリス当局による尋問を待っていた1945年５月24日、彼は妻にこう書き送っている。「父が助けてくれたらよいのだが。私は父に大事な証拠書類を二通、渡しているんだ。1943年のクリスマスにもらったカードだ」。

ほどなくして私はさらにもう一歩、踏み込んだ。そのきっかけは、私たちが放送させたロンドンのラジオ番組のせいで、ＳＳが大騒ぎに陥ったことだった。その放送では、殺人

機構で重要な地位を占めていたＳＳ隊員を正確な個人データと共に名指しした上、死刑に処すと脅していたのである。個人調書を見て知っていたのだが、そのころヴィルツの奥さんは丁度、誕生日を迎えていた。以下は私の記録である。

「我々は園芸に携わっている囚人から花を調達し、病棟の患者となっていた画家（フェイキエルは彼の名前を覚えていた。ミエチスラフ・コチェルニアクだ）に、写真に基づいてヴィルツの妻子の絵を描かせた。そしてチェコ人の伝令、エーミールに花と絵を自宅にまで持って行かせたのである。

翌朝、ヴィルツはすぐにベルを鳴らして私を呼んだ。「書いてほしいんだ」というと、救急車で連れてきた女性看守の検査所見の口述を始めた。最後の方の文章はとても早口で話されたので、口述が終わった後も、私はまだ書き続けなければならなかった。さあ済んだ、と思って立ち上がろうとしたとき、彼は机の方に身を乗り出してきた。

『ところで、ラングバイン。あの絵と花のことを知っているかい？』。『はい』。『なぜあんなことをしたんだい？　恐縮するじゃないか』。『あの絵にはそれなりの意味があるんです。博士』。

彼は顔を赤らめ、問いたげに私を見つめた。『博士の御一家にも死刑判決が言い渡されたことを、御存知でしょう』。私はちょっと間を置いた。彼は黙っていたが、そのことを知っているようだった。別段驚きもしなかったからだ。

『あの絵で表したかったのは、死刑判決が取り消されたということなんです』。『そうか。だが、どうして、つまりどこからそんなことが分かるんだい？』。『私には博士にお伝えする権利があります。私が一人で勝手に言っているわけではありません』。

シーンとしている。壁には収容所員数と死亡率の低下を赤と黒のジグザグで示す表が貼ってある。彼の息が聞こえる。

『それはよかった。お礼に子どもたちと妻は、何ができるだろう？』。再び静寂。『君にお礼を言わなくては、ラングバイン』。

『私個人に、ではありません、博士』。

ドアのところで私はいつも通り、軍隊式に姿勢を正したが、それも今ではむしろ形式に過ぎなくなっていた。

私だけではなく組織と関わっているということをヴィルツに知ってもらうのが、我々の計画だった。彼はもう我々に反対するような真似はできない。なぜなら自分と家族を我々が救いたがっていることを、証拠つきで知ったからだ。ヴィルツは愛する妻子の生命を守ろうとするだろう。医務長殿、今やあなたは我々の手先なのです！」。

ヴィルツは弁明書でこのエピソードには触れず、次のように書いているだけである。「私は信頼していた囚人たち、特にラングバイン氏と、つねに緊密に協働していた。収容所運営によって私の活動が阻止されたり弊害が生じたりすると、ラングバイン氏が知らせてくれた」。

ヴィルツの人柄を表すこととして、彼の家族が食糧配給券で生活していたことが挙げられる。これは、彼の家で臨時の手伝いをしていた「エホバの証人」の信者から聞いた話だ。この点で彼は、堕落のジャングルにおける稀な例外だった。

しかしながらヴィルツでさえ、死へと定められたアウシュヴィッツの「人的資源」を実験に利用するという誘惑には抵抗できなかった。被験者がほしいというクラウベルク教授とシューマン博士の要望を満たすよう、ヴィルツは命じられたのである。クラウベルクとシューマンが「モルモット」として自由に使えるよう、多くの女性が第10ブロックに移された。ハンブルクで仕事をしていた産婦人科医の弟と協力して、ヴィルツは子宮ガンの早期診断法を開発しようとしていた。後にこの弟は、兄は膣鏡を使った実験を「自発的に」始めた、と陳述している。「私が見たところわずかだった標本は、アルトナにある私たちのクリニックの実験室に送られ、そこでハンゼルマン博士が検査をしました」。ヴィルツの弟は私に対して、これらの実験は全く危険なものではないと断言した。実験に関わっていなかった医師たちも、子宮口からの組織標本採取は健康を害わないと保証している。そのブロックの看護人が証言しているように、手術が痛みを伴っていたことは別として、強制収容所における実験の実施があらゆる女性にとって甚大な精神的負担を意味したことを、ヴィルツは熟知していたはずである。あのような場所で、「大したことのない手術で、すぐ終わります」と言われて、誰が信じるだろうか。永久に妊娠不可能にさせる手術を受けるとき、およそ何か教えてもらえるとしたら、「全く危険はありません」と言われていたのである。

ヴィルツは実験ブロックで出会った囚人医のザームエールにも、自分の一連の実験をやらせた。ザームエールによる殺害は、ヴィルツが少なくとも知らずには、行なわれなかったはずである。

さらにヴィルツは同じブロックで、フランス人の女医、アデライド・オヴァールと一緒になったが、彼女は人体実験に協力することを拒んだ。ユダヤ人を使った実験は違法ではない、と反ユダヤ主義的な理由を持ち出してヴィルツが彼女を説得しようとしたのは、先述の通りである。とはいえ、断固として拒否したにもかかわらず、オヴァールは何の罰も受けていない。

アウシュヴィッツの医務長としてヴィルツが行なったもっとも陰惨なことは、私が見たところ、「たった」二人の人間を死なせたことだろう。これはアウシュヴィッツの基準からすれば瑣末な事件に過ぎないが、他の何よりもヴィルツの心を苦しめた。我々が喜んで彼を守ることを、家族の絵を渡して確約した後で、その事件は起きた。次のように私は記録している。

「第20感染ブロックで、１階にある二つの小部屋が空にさせられた。『実験のためだ』とハンス（ザウアー）は言う。ブロック最古参なのだから、彼の言うことは正しいに違いない。

実験？　ヴィルツは私には、実験のことなど一言も言っていない。私は毎晩、その二つの部屋を見に行った。入室は厳禁だったが、私は当然のことのように守衛と看護人の横を通り過ぎた。両者とも、医務長の書記が部屋に入るのをあえて止めようとはしなかった。今夜は部屋は空ではなかった。４人のユダヤ人が横になっている。４人とも皆元気だ。私は病棟の収容所最古参（フェイキエル）のところへ行った。

『第20ブロックの二部屋にいるユダヤ人は、どうなるのか教えてくれよ』。『言っちゃいけないんだ』。『いいじゃないか、教えてくれよ』。『医務長から、君にも言うなとずばり命

じられたんだ。だから僕から聞いたとは言わないでくれ。あの４人は人工的に発疹チフスに感染させられる。医務長は発疹チフスの新薬を試したいんだ。でも、ここには発疹チフスの患者はいない。医務長に言われてビルケナウに行ったが、あそこでも看護室に患者は一人もいなかった』。

『彼らはもう感染させられたのか？』。『ああ、昨日だ。ヴィルツ自身がここに来た』。

私はよく考えてみた。このことに関してヴィルツと話をすべきだろうか。そう、話をしなくてはならない。彼が一度こんな手を使った以上、また同じようなことをするかもしれない。私はヴィルツを掌中に収めていなければならないのだ。彼と二人きりになれ、彼に時間があるような機会が来るのを、私は待った。

『博士、お話があるのですが』。『いいよ』。

初めはいつも通りのやり取りだった。しかしその後に続いた言葉は、これまで交わしたことのないものだった。

『昨日、博士が４人のユダヤ人を入れた第20ブロックの二部屋に行ってきました』。『なぜ、それを知っているんだ？』。彼の声はとげとげしかった。

『博士、我々が収容所で知らないことは少ないものです」。私は「我々」という語を強く言った。『それで？』。『４人は今、発疹チフスにかかっています。病棟に来たときは元気だったのですが』。

『発疹チフスの新薬を手に入れたんだ。とても効果がありそうな薬だ。効き目のある発疹チフスの薬があれば、科学だけでなく囚人のためにもなる』。

『あの二つの部屋に横たわっているのは４人の人間なんです。昨夜は高熱を出していました』。

ヴィルツは顔を真っ赤にした。『ここの医務長は私かね、それとも君か？』。彼はこぶしで机をドンと叩いた。本当に激昂している。私に向かって彼がこんな話し方をしたことはない。

『もちろん博士です』。私は速記用メモ用紙をきちんと置いて黙り込み、口述を待った。

『今はもう君に用はない』。私は踏み込み過ぎてしまったのだろうか。彼は私にとって、危険な存在になるのだろうか。そもそもヴィルツは危険な存在になるのだろうか。

翌日、私はヴィルツに命じられると、必ず「はい（Jawohl）」といかめしく軍隊調で応じた。口述の最中に一度、彼は対話に誘うようなコメントをしたが、私はそれには乗らなかった。二通の文書を口述する間、ヴィルツは長い休みを取った。私に話を始めさせたいようだったが、私はうつむいたまま黙っていた。自分の弱みを悟られてはならないからだ。話し始めるのは彼の方でなければならない。部屋を出るとき、普段以上に私はピシッとした姿勢をとった。

午後、ついに彼が例の問題を持ち出した。来期に設置されるらしいビルケナウの新区域に水道管を敷設することに関して、建築施工部への文書を口述していたときのことだ。ヴィルツが突然、『昨日もあの４人のところに行ったのか？　様子はどうだった？』と尋ねてきたのである。

『はい（Jawohl）、４人の具合は悪くなっていました』。『食事は充分与えられているの

だろうね』。『発疹チフスにかかりますと、食欲はなくなります』。彼は私の視線を避けた。内心忸怩たるものがあるのだろうか。

『博士をお助けするのを、むずかしくしないで下さい』。『どうしてだ？　何のことだ？』。『以前お渡しした絵のことです。私は博士のために力を尽くしてきました』。

机のガラス板を彼の指が打っている。『これが最後だ、ラングバイン。収容所でこんなことは二度としない。それで納得してくれるかい？』。

『ええ』。彼はもう勝手な振舞はできないのだ。赤軍がまだスターリングラードで戦っていて、ポーランド国境まで迫っていなかったなら、この対話は別なものになっていただろう。発疹チフスに感染させられた４人のユダヤ人のうち、２人は死亡した。私はそれをヴィルツに伝えた」。

２人の死者を出したこの実験は、私の考えでは、ヴィルツが殺人機構の中で命令を受けて行なったどんなことよりも、重みがある。この人体実験は全く彼個人に責任があるからだ。ヴィルツは実験でもっとも大きな失敗をした。彼に対する手厳しい非難のほとんどが実験ブロックにいた囚人に由来することは、偶然ではない。たとえばジャン・サロモンはヴィルツについて、「大変丁重だったけれど、悪質きわまる典型的なサディストだ」と述べている。

ヴィルツと交わした最後の会話も、私は次のように記録している。

「けさ、とても興奮したエーミールに、医務長の部屋のラジオのところまで連れて行かれた。（ＳＳの勤務時間が始まる前に、私たちはいつも医務長の部屋でラジオ・ロンドンを盗み聞きしていた）。ＳＳはまだ眠っている。アナウンサーの声は誤解の余地なくはっきりと、『ルーマニアが降伏しました。南部戦線は突破されました』と語った。私たちはヴィルツの机の前で見つめあった。私は祖国オーストリアのことを考えずにはいられなかった。

天気はよく、ＳＳ隊員がのんびりとやって来た。彼らはまだ何も知らないのだ。ヴィルツがベルを鳴らした。彼もまだ気づいていない。新たな情勢に面して、彼の本当の政治的立場が普段よりよく理解できるだろう。

『博士、ルーマニアがドイツに宣戦布告したのを御存知ですか。ルーマニアはロシアに寝返ったのです』。

『何だって？　どこでそんなことを聞いたんだ？』。

『我々囚人には、何でも早い目に耳に入りますから』。

『それは大変だ』。

『これで戦争に負けることは決定的ですね』。私はもう少しで、戦争に『勝つこと』と言いそうになった。

『本当にそう思っているのか？』。

『もちろんです』。

『ロシア軍はビスワ川で最終的に食い止めたはずだが』。

『この２年間、ロシア軍を最終的に食い止めたという話を、何度聞かされたことでしょう。ロシア軍は次の攻撃でこのアウシュヴィッツにまでやって来ます。同時にオーバーシ

ュレージエンにも侵攻してくるでしょう。東部にも西部にも、確たる戦線はもうありません。敗戦は決定的です、博士』。

『恐ろしいことだ』。『いいことなのですよ、博士』。

『どうしてそんなことが言えるんだ！　君だってドイツ人だろう』。

『私が考えているのは、博士が以前教えてくださった構想のことです。アウシュヴィッツの拡張案ですよ。戦争に勝ったら、収容所をもっと大きくするという話でした。博士も私もアウシュヴィッツを身をもって知っています。この収容所をもう拡張できないというのは、よいことではないでしょうか』。

ヴィルツはかつて、この計画を私に話してくれた。収容所拡張はいつ実施するつもりなのかと尋ねると、『戦後だ。勝てばもっと大きな収容所がいるだろう』と彼は答えてくれた。しかし今はじっと黙っている。彼はうなだれた。

『では軍用病院の仕事はすっかり無駄になるのだろうか』。

『もちろんです』。この数ヶ月間、ヴィルツはＳＳ軍用病院をここに建設することに、とりわけ力を注いでいた。それは彼の誇りだった。二、三週間後には開設される予定で、ポールとロリングも祝賀式に来ることになっていた。彼はその当日、ＳＳ少佐に昇進できると踏んでいた。彼はもう話すのを止め、力なく手を机についた。

『無駄にならないことが、たった一つあります。この収容所で私たちがしたこと、人々を助けたことです』。彼は何も答えなかった。だめだ。逃亡計画に組み入れられるほど、ヴィルツはまだ吹っ切れていない」。

次の日の朝、私は所長の指示に従って急遽、アウシュヴィッツから移送される人員の中に入れられた。ヴィルツの下で私がしていた仕事は、カール・リルが引き継いだ。

このこともヴィルツの人物像とぴったり合う。ナチズムの真の顔をアウシュヴィッツで他の誰よりもはっきりと目にしながら、彼はそれでもなおナチズムの敗北を恐れていた。別の折にも彼の話から窺い知れたことだが、「絶滅施設で起きていることを、総統は御存知ないのだ」という誤った考えに最後までしがみついていたのである。ナチの運動の一員であることは正しいと自分に納得させるために、彼にはそうした虚構が必要だったようだ。

ロシア軍がアウシュヴィッツに近づいて来たとき、撤退に際して病人と行軍不能の者は殺す計画があるという情報を、抵抗組織は入手した。それゆえリルがヴィルツと話をしたところ、ヴィルツは「そのような計画があったのは確かだが、移動できない者は生きたままここにおいて置くことを、私が認めさせた」と語った。事実、その通りになった。撤退の後、数々の騒乱が起き、戻ってきたＳＳの部隊に囚人が殺されることもあったが、収容所に残された大半は、1945年１月27日、ロシア軍に解放されたのである。

ヴィルツは弁明書で、「アウシュヴィッツ強制収容所から最終的に退却する際、数多くの病気の囚人は殺される計画だったが、私はそれを阻止できた」と述べている。

ヴィルツは別の収容所へ異動となり、戦後は弟の住むハンブルクへ戻ることができた。そこから1945年５月24日、妻に宛てて彼はこう書いている。「人間的に未熟で明晰な判断

力を欠いていたため、時代の真の顔を早めに認識できなかったけれども、もしかしたらそれもまた神の思し召しかもしれない。その後、人間には不可能と思われるほど困難な任務を課せられたとき、力の及ぶ限り絶滅から人を救うことになったからだ」。

また別の手紙では、ヴィルツは次のように書いている。「そうこうするうちに、私がイギリス人と話をするように進めた。けれども決定は月曜まで待たなければならない。さらにそこから先がどうなるかは、まだ予測すらつかない。こんなひどく大それたことをするのに、私がよく知っているアウシュヴィッツの囚人の一人でも来て証人になってくれたら、私は何でもあげるのだが。良心に疚しいところはないけれど、これはとても難しい策だ。相手側が私の任務の重さに理解を示してくれるかどうか、全く分からないのだから。どれほどの重圧が私にかかっていたか、またかつても今も私の頭を悩ませている難題を、相手が理解してくれるだろうか」。

ヴィルツはイギリス軍に逮捕された。彼を尋問したドレイパー大佐が、何十年もたってから逮捕後の経緯を私に教えてくれた。大佐はヴィルツを目の前に連れて来させ、手を差し出してこう言ったのである。「私が今、握手しようとしているあなたは、アウシュヴィッツの医務長として400万人の死の責任を負っています。明日、そのことについて尋問しますから、夜の間にその責任についてじっくり考え、自分の両手をしっかり見つめておいて下さい」。

その夜、ヴィルツは首を括った。発見されたときはまだ息があったが、二、三日後に亡くなった。1945年９月20日のことである。

20年近くたってから、ヴィルツがアウシュヴィッツで果たした役割についてドレイパー大佐に話したとき、あのときの自分の行動は間違っていたのだろうか、と訊かれた。私は否と答えた。大佐が知っていたのはアウシュヴィッツと、そこでのヴィルツの地位だけで、詳細は分かっていなかったからである。ほぼ同じころ、私はヴィルツの奥さんとも言葉を交わした。「夫にとって、あれが人生を終えるのに一番よい時だったと思います」と彼女は言った。私はうなずいた。